



ITを活用した 災害に強い町づくり



茨城県常総市根新田町内会
事務局 須賀 英雄

1 はじめに

2015年9月の「関東・東北豪雨災害」では、地区の上流約4km地点で鬼怒川の堤防が決壊し、地区の殆どが床上浸水の甚大な被害を受けました。コミュニティ活動の拠点となっていた公民館も床上浸水1mの被害を受け、自然の猛威の前に為す術も無い人間の非力さに、ただ茫然とするだけの日々が続きました。

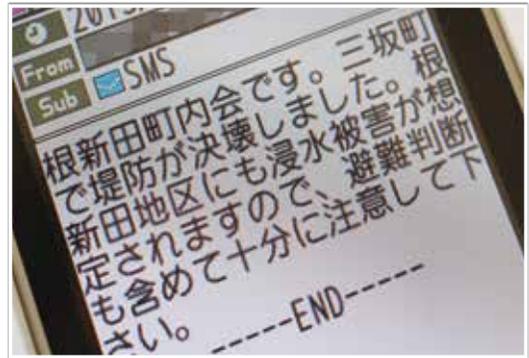
水も引き、各地から災害ボランティアの皆さんが続々と支援に入り、泥だらけになりながら一生懸命お手伝いして下さる姿や温かい言葉に大いに励まされ、町民一丸となった復旧活動と「災害に備えた町づくり」が始まりました。

2 ITを防災活動へ活用

さかのぼって「関東・東北豪雨災害」の前年である2014年8月、地域コミュニティサイト「わがまちねしんでん」の運用を開始、さらに10月には情報伝達のツールとして携帯電話のショートメールを使った全町民への「SMS一斉送信システム」の運用も開始しました。

そして翌年の9月10日に発生した「関東・東北豪雨災害」で、各避難所や親類宅に分散した町民と町内会を結ぶ情報共有の手段として「SMS一斉送信システム」が驚異的な効果を発揮しました。決壊前の鬼怒川の水位情報の発信から始まり、決壊時の避難喚起、決壊後の地区内の浸水状況や帰宅の為の道路情報、支援

物資の入荷情報、災害ボランティアさんの手配情報など、合わせて50通の緊急情報を浸水した地区内から町民の携帯電話に発信し続けました。



SMS一斉送信システム

3 災害犠牲者ゼロを目指して

そして水害の怖さ、自然災害の猛威に立ち向かうべき、普段からの「地域の助け合い」を更に強固なものにするべく「災害犠牲者ゼロを目指して」本格的な自主防災活動に邁進することとなりました。

水害の場合は、台風の発生から河川の水位上昇、氾濫等と発災までのプロセスに予想がつくので、国土交通省下館河川事務所、常総市の協力で「水害時の避難行動計画マイ・タイムライン」を作る取組を開始し、2017年2月に完成しました。町内会のレベルでは全国初の取組で、これで台風発生から時系列的に自分は何をするのかが分かり、計画的な行動が出来る様になりました。

2017年1月には事務局宅のベランダに鬼怒川に注ぐ地区内の千代田堀川を監視

する防災カメラを設置し、その映像を町内会のホームページに自動転送、誰でも見られる様に公開しました。この映像を監視することによって住民自ら避難の判断が出来るようになり、避難所や親戚宅にいても地区内への浸水の予測が付き、被災状況の把握や地区外からの帰宅の判断に大いに役立つことになりました。



防災用ライブカメラ

大地震の場合は、事前の対策は困難を極めます。地震が発生した時に自身や家族の安全を確保するのは当然ですが、“隣近所の安否を迅速に確認して救助する”といった行動を、その時町内にいる人達が確実に実行出来れば、自主防災活動の第一の目的は達成されたと言っても過言ではありません。そこで、在宅家族の安全が確保できたら「無事ですタオル」を



無事ですタオル

玄関先に掲げて、家族の安全を告知してから隣近所の安否確認をする。要救助者がいれば「SMS一斉送信システム」を使って町民の携帯電話に一斉に救援要請を発信することで、安否確認から救助までを効率的に迅速に実施することが可能となりました。

現在では7名の防災士が自主防災組織を牽引し、「きめ細やかな女性の特性を自主防災に生かす」ことを基本に、各班から選出された女性防災委員が組織の最前線で活躍しています。



防災委員会

4 おわりに

古き時代から言われて来た「向こう三軒両隣」の精神。都会ではすっかり影を潜め、地方でも世代の交代と共に希薄になりつつあるなかで、未曾有の災害を経験した私達は失われたこと以上に地域の助け合いの大切さを改めて心に刻みました。自主防災の根底によどみなく流れる共助の精神、地域コミュニティをしっかりと後世につないでいくことが我々の責務ではないでしょうか。